「ひっ！♡♡あ♡、ぁあぁ……っ！♡♡」

男に腰を掴まれ、前後に揺さぶられる。

そのたび、少年の艶やかな黒髪がぱさぱさと宙に踊る。

鋭い雁首の傘に、腹側のその一点を抉られるたび、失禁しそうなほど強い淫楽がこみ上げた。たまらず全裸の痩身をくねらせると、白魚の肌に男たちの視線が絡みつく。

「ほら……、ほら……はやくしないと、もっと仕置きを追加するぞ」

「あっ♡、あぁ♡、ひぃ…っ♡♡」

腰からは手を離してもらえたものの、今度は下からズッ、ズッ、と突きあげられ、ますますみずからの挿入が困難になる。

この態勢でこんなことを始めて、もうどのくらい経つのだろう。一時間以上経ってるようにも思われるし、ひょっとしたらほんの五分なのかもしれない。しかしどちらにせよ、体勢的にもう限界だった。太ももの内側が、ぎしぎしと攣(つ)りそうに軋(きし)んでいる。

「あぁ、あぁあぁあぁ……ッ！♡♡♡」

ズルッと膝が滑(すべ)ったのが、汗のせいか疲れのせいかはわからない。
ずぶずぶずぶ……っ目もくらむ勢いで太魔羅(ふとまら)に貫かれ、弓形にのけぞって薄い胸をさらす。

「ひぃいっ！？♡♡」

突き出した胸に、左右からひやりとした手に触(ふ)れられる。
男たちの手は濡れている。

「ほぉら、主菓子(おもがし)をこさえましょう」

「今日の練り切りはどんな味になるだろうな」

まるで生地(きじ)をこね合わせるように両胸を薄い胸房ごと揉みこまれ、男たちの手についた液体が塗り広げられる。

「ひぁ…っ♡♡あぁあ…っ♡あぁあ…ッ！？♡」

それが水ではなく浜菱茶(ハマビシちゃ)であることにはすぐに気づいた。
ひんやり濡れた場所はにわかに熱を帯び、とくに皮膚の薄い乳頭はカッと燃え上がって桜の芽のように尖った。

催淫効果のある浜菱(ハマビシ)が、甘く苦く、体表からも鼻腔からも、少年の躰と脳を酔わせていく。

「んぅ…っ♡♡ひ♡、あ…っ♡あぁ……ッッ♡♡」

乳首にわざと指を引っかけるように、男たちに胸全体を混ぜ返され、腰がひくひくするたびなかで篦深(のぶか)く挿さったものを意識させられる。
浜菱(ハマビシ)の成分に反応し、ピリピリと痺れる乳首。この硬くなった場所を今すぐ自分の手でひねりあげたいほどだが、紫の組紐で後ろ手に縛られていてはそれもかなわない。

「次は茶を点(た)てていきますよ」

「！あぁ…ッ！？♡♡」

男たちの手が引き去ったかと思ったら、今度は硬い筆のような質感が胸を這った。

「これが、好きなんだよな」

「ひ、ぃいいぃ！♡♡」